アウトバックとグレート・バリア・リーフ
—アニメーション映画において地域らしさを「見せる」には—

永　山　友　子

This study considers how regional features were presented in two American animated films set in Australia, *The Rescuers Down Under* and *Finding Nemo*, both of which were released in Japan with Japanese subtitles. Foreign movies subtitled in Japanese can be categorized as multimodal discourse, of which producers can decide how they want to show regional features on the screen. The films respectively depicted world-famous landmarks of the Australian Outback and Sydney Harbor in the images, taking advantage of the visual mode, while they had their characters speak English with Australian accents, utilizing the auditory mode. It is interesting that not every Australian character spoke Australian-accented English. Certainly animals indigenous to the place did speak English with the broad accent. The heroes in the stories, however, never spoke English with the regional accents despite their Australian identity. Apart from such indigenous animals, only the villains spoke strong-accented English. Apparently their accents depended on the roles they played in the stories. Unfortunately the Japanese subtitles failed to evoke such auditory differentiation cues observed in the original films.

キーワード：地域らしさ，マルチモード・ディスコース，画像，英語の訛り，キャラクターの役割

1. はじめに

アウトバック (The Outback) とグレート・バリア・リーフ (The Great Barrier Reef) を目にしたら，恐らく，多くの人はオーストラリアを思い

浮かべるだろう。英語アニメーション映画『ビアンカの大冒険〜ゴールデン・イーグルを救え！』の冒頭では，アウトバックが大きく映し出される。『ファインディング・ニモ』は，きれいな海のサンゴ礁のシーンで始まる。

本稿では，オーストラリアを舞台にしてアメリカで制作されたこれらのふたつのアニメーション映画を取り上げて，それぞれの映画における地域らしさの「見せかた」について考える。

2. 問題の所在

2.1. ヴァーチャルな世界

メディアによって創り出される世界は，現実の世界と区別され，ヴァーチャルな世界と呼ばれることがある。常に動き続ける広い世界で起こるできごとを，わたしたちが常に把握することは不可能に近い。自分がいるところから時間的にも物理的にも遠いところで起きていること，起きたことを知るためには，情報を伝えてくれる何らかのメディアに頼らざるを得ない。ところが，メディアが全ての情報を伝えてくれるわけではない。確かに，わたしたちが接する情報の量は飛躍的に増えたが，メディアは現実に起きたできごとを何らかの基準で取捨選択した上で情報を流すからである。

現実の世界と混同せずに，ヴァーチャルな世界をヴァーチャルな世界として捉えることは，メディア・リテラシーの核心部分である。菅谷 (2000, v) によれば，メディア・リテラシーは，「メディアの特性や社会的な意味を理解し，メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」するとともに，自らの考えなどをメディアを使って表現し，社会に向けて効果的にコミュニケーションをはかることでメディア社会と積極的に付き合うための総合的な能力」である。本稿では，この定義の前半部分（「メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」する」）に目を向けたい。

2.2. マルチモード・ディスコース (multimodal discourse)

外国語映画の日本語字幕版は，ふたつ以上の表現モードを用いるマルチモード・ディスコースの一種である。「モード」は，「ディスコースと複数のタイプの（相互）行為を同時に具現化できるような，記号となるリソー

ス」(筆者訳) (Kress and van Leeuwen, 2001: 21–22) と定義される。地域らしさを表現するモードとしては，画像と音声言語，そして日本語字幕の3つが考えられる。1) 地域のランドマークを観客に「見せる」; 2) 登場するキャラクターの言語行動に地域らしさを反映させる ; 3) 字幕に地域らしさを反映させるという方法である。

2.3. リサーチ・クエスチョン

オーストラリアを舞台としたアニメーション映画において，地域らしさはどのように表現されているのだろうか。そして，それらの映画が日本で公開されるとき，地域らしさは，どのように伝えられているのだろうか。

3. データ

3.1.『ビアンカの大冒険〜ゴールデン・イーグルを救え！』

『ビアンカの大冒険〜ゴールデン・イーグルを救え！』(原題 *The Rescuers Down Under*) (以下，『ビアンカ』) は，ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ™ 長編アニメーション映画第29作として制作され，アメリカで1990年11月16日に公開された。1977年に公開された，同じくウォルト・ディズニー・ピクチャーズ™ 制作アニメーション映画『ビアンカの大冒険』(原題 *The Rescuers*) の続編である。MPAA (Motion Picture Association of America = 米国映画協会) による審査では「一般向け」(G) とされ，1990年度 LA (Los Angeles) 映画批評家協会賞最優秀アニメーション作品賞を受賞した。日本では劇場公開はなされず，ビデオのみの発売となった。

この映画は，ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ™ 初の全編デジタル長編映画であった。以前に劇場公開されたディズニー™ 映画を前編として，その続編をディズニー™ みずからが制作する試みも初めてだった。しかしながら，前作の大成功にもかかわらず，続編の興行成績は振るわなかった。1996年公開予定の映画第3弾も計画されたが，主人公ビアンカの声を担当していたエヴァ・ガボールが同じ年に亡くなったために打ち切られた (Wikipedia, http://en.wikipedia.org/wiki/The_Rescuers_Down_Under)。

主役のビアンカとバーナードの設定は，概ねマージェリー・シャープの原作に沿っているが，繰り広げられる物語は映画独自の展開である。オー

ストラリア中部に位置するアウトバックを舞台に，密猟者の罠にかかったゴールデン・イーグルや他の動物たちを助けようとする少年コーディと，ニューヨークに本部を置くネズミたちの救助救援協会から派遣されたネズミ，ビアンカとバーナードの活躍を描く。

3.2.『ファインディング・ニモ』

『ファインディング・ニモ』（原題 *Finding Nemo*）（以下，『ニモ』）は，ピクサー・アニメーション・スタジオ™が制作，ウォルト・ディズニー・ピクチャーズ™が配給を担当した映画の第5作として制作された。それまでに両者が組んで制作した映画と同じように，全編がコンピュータ・グラフィックスからなるアニメーション映画である。MPAAによる審査では，「一般向け」(G) とされた。アメリカ公開は2003年5月30日，日本では2003年12月6日に公開されて，世界的な大ヒット作となった。2004年3月までには，全世界での興行収入が8億5千万アメリカドルとなり，歴代興行収入ベスト10に入った。第76回アカデミー賞®最優秀長編アニメーション作品賞も受賞した。

オーストラリア東部クイーンズランド州沿岸のグレート・バリア・リーフを舞台に，ダイバーに捕まえられたカクレクマノミの子ども，ニモと，ニモを助けようと旅をする父親のマーリンが再会するまでを描く (Wikipedia, http://en.wikipedia.org/wiki/Finding_nemo)。

4. 分析

4.1.『ビアンカの大冒険〜ゴールデン・イーグルを救え！』

オーストラリア中部にあるエアーズロックを遠くに望み，カメラがどんどん迫っていく。そして，タイトル (The Rescuers Down Under) が表れ，物語が始まる（図1）。

図1の直後に，エアーズロックの近くにある家がズーム・アップされる。その家から，朝起きたばかりの少年コーディが現れる。コーディは，部屋の窓から呼び出しのサインを見て家を飛び出し，森に駆けつけた。すると，カンガルーのファルーが待っていた（図2）。

ファルーは，コーディに助けを求める。マラフーテという名の金色ワシ（ゴールデン・イーグル）」が密猟者に捕まってしまったので助けてほしいと告げる。

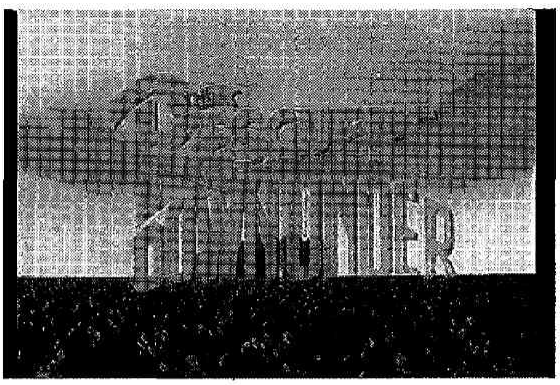

図1　『ビアンカ』のタイトルバック
©Disney Enterprises, Inc.

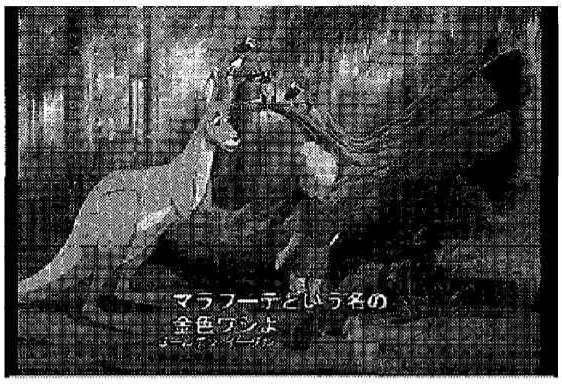

図2　ファルーとコーディ
©Disney Enterprises, Inc.

字　幕：「マラフーテという名の　金色ワシよ」
セリフ：“Her name is Marahute, the great golden eagle.”

“the golden eagle” の訳を「ゴールデン・イーグル」とカタカナ語にせず，「金色ワシ」と日本語に訳した上で「ゴールデン・イーグル」とルビを振ったところに，字幕の工夫が見て取れる。興味深いことに，コーディもファルーもアウトバックに住んでいるのにもかかわらず，オーストラリア訛りのない英語を話している。

ファルーの話を聞いたコーディは，険しい崖をよじ登り，縛りつけられていたマラフーテを助け出す。その後，マラフーテに乗せてもらい家路についたコーディは，縄で縛られ吊されていたネズミを見つける。実は，そのネズミは囮であり，下には落とし穴が仕掛けられていた。コーディが落ちたところに，その罠を仕掛けた密猟者マクリーチが現れる（図3）。

図3　マクリーチ登場
©Disney Enterprises, Inc.

字　幕：「ディンゴか野ブタか　丸々　太った…」
セリフ：“A dingo, a fat old razorback ...”

マクリーチもアウトバックの住人であるが，オーストラリア訛りは聞かれない。Lippi-Green (1997: 90) の指摘によれば，マクリーチは「わざとらしいアメリカ南西部の訛り」（筆者訳）のある英語を話している。

コーディに助けられたネズミの通報を受けて，ネズミたちの救援救助協会ニューヨーク本部にメッセージが送られる。画面にはオーストラリア大陸が大きく映し出され，中央辺りから一本の線が伸び出す。この線の出発線は，エアーズロックのあるアリス・スプリングスの位置とほぼ一致する。英語表記もなく，キャラクターのセリフや字幕にも表れないが，この物語の舞台がオーストラリア中部のアウトバックであることを，画像を使ってはっきりと見せている（図 4）。

オーストラリアから送られたメッセージは，アメリカ各地を経てニューヨークに届く。ハワイ中継所にあるコンピュータのディスプレーにメッセージが表示され（図 5），ハワイのネズミがメッセージを読んでいる。ここでは，マルチモード・ディスコースにおける視覚モードがうまく活用されている。キャラクターにセリフを与えて観客に聞かせる代わりに，画像の中に英語表記を埋め込み，キャラクターに見せる。日本の観客に対しても，メッセージに日本語字幕をつけて見せている。字幕では省略されているが，RAS は，ビアンカとバーナードが所属する救助救援協会 (Rescue Aid Society) を指している。

英語表記：“RAS... RAS... ATTENTION BOY KIDNAPPED IN

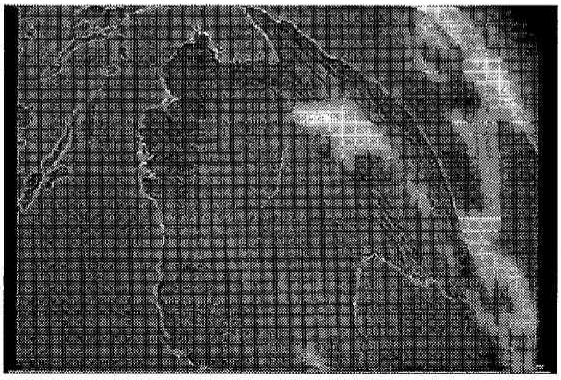

図 4　オーストラリアからの送信
©Disney Enterprises, Inc.

図 5　オーストラリアからの受信
©Disney Enterprises, Inc.

AUSTRALIA IMMEDIATE ACTION REQUIRED”

字　　幕：「緊急出動要請　豪州で少年さらわる」

セ リ フ：なし

救援救助協会本部から派遣されたビアンカとバーナードは，アホウドリのウィルバーに乗って旅に出た。図6は，ふたりを乗せたウィルバーがシドニーハーバーに到着したシーンである。シドニーハーバーへの言及は，セリフにも字幕にも表れない。代わりに，シドニーの有名なランドマークであるオペラハウスが見て取れる。但し，オペラハウスへの言及も言語的にはなされない。

字　幕：「どいた　どいた　ネズミ君が通るよ」

セリフ：“Gangway! Comin’ through! Mice on board!”

図7は，シドニーを通り過ぎてオーストラリア中部のマグワン中継所に到着したウィルバーが，中継所を管理するカンガルーネズミ，ジェイクに連絡を取り，着陸許可を得ようとしているシーンである。このシーンで，初めてオーストラリア訛りのある英語を話す地元のキャラクターが登場する。以下，オリジナルの英語のセリフにおいて，オーストラリア訛りが観察された箇所には下線を引いた。

字　幕：「滑走路が短すぎるんだ」

セリフ：“I <u>say</u> [sãi] <u>again</u> [agãin], <u>mate</u> [mãit], our runway is too

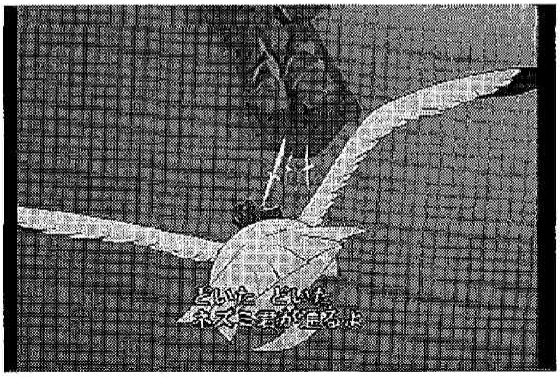

図6　ウィルバー，ビアンカ，バーナード，シドニー到着

©Disney Enterprises, Inc.

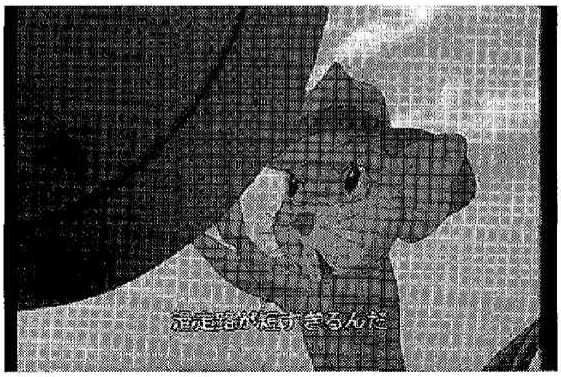

図7　カンガルーマウス，ジェイク登場

©Disney Enterprises, Inc.

short."

ジェイクの発音に観察された二重母音 [ãi] は，[ai] に近い発音であり，やや鼻音化している。このジェイクのセリフの直後にくる，アメリカからやってきたウィルバーのセリフ "And I say again, "mate" [meit], I'm coming in!"（字幕：「何が何でも着陸するぞ」）と聞き比べると，オーストラリア訛りがよりよく聞き取れる。

一方，ネズミたちがコーディを助け出すために動いているのを知らないまま，コーディはマクリーチの住みかに連れて行かれる。檻の中には，マクリーチがそれまでに捕まえた動物たちがいた。ところが，オーストラリア訛りのある英語を話すのは，コアラとカンガルーのみである。紙数の都合上，本稿ではカンガルーが話しているシーンを紹介する。

マクリーチの住みかでは，捕らえられた動物たち（オーストラリア特有の希少動物ばかり）が檻に入れられ，鎖でつながれていた。動物たちは檻から抜け出そうと相談をしているが，失敗をしてしまい自分の頭をたたくエリマキトカゲに，カンガルーが声をかける（図 8）。

字　幕：「無理するな　頭が割れるぞ」
セリフ："Take [taik] it easy, mate [mait], you don't want to hurt yourself again [agãin]."

again [agãin] の二重母音は，take [taik] の [ai] や mate [mait] の [ai] と比べると，[ei] に近い。このセリフにおいては，やや鼻音化している。

オーストラリア英語は，ブロード・オーストラリア英語 (Broad Austral-

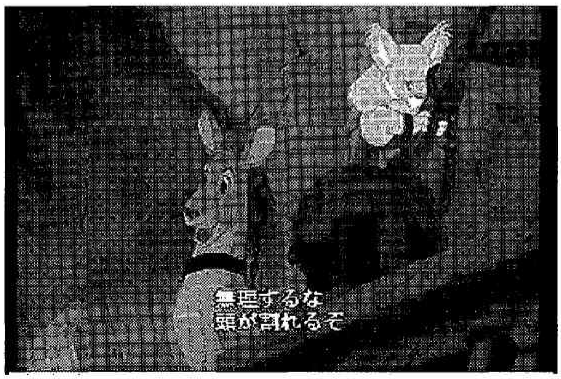

図 8　マクリーチに捕まったカンガルー

©Disney Enterprises, Inc.

ian English)，一般オーストラリア英語 (General Australian English)，「より教養のあるオーストラリア人が使う」英語 (Cultivated English)（横瀬，2003）の3つに大きく分類される。

Wikipedia によれば、ブロード・オーストラリア英語は，「典型的で最も認識しやすい変種」である。「オーストラリア国外で制作される映画やテレビ番組においてオーストラリアのキャラクターが用いており，世界中で知られている」（筆者訳）。一般オーストラリア英語は，「オーストラリアのステレオタイプとなっている変種」とされている。「大多数のオーストラリア人が用いており、オーストラリア国内で制作された映画やテレビ番組では，一般オーストラリア英語が主流となっている」（筆者訳）。そして、「より教養のあるオーストラリア人が」使う英語は，イギリスの容認発音と多くの類似点をもち，間違えられることもしばしばある。しかし，「この変種を話すオーストラリア人は人口の 10% に満たない。」（筆者訳）

興味深いことに，冒頭で（図2）コーディに助けを求めたカンガルー，ファルーは，同じカンガルーであるのにもかかわらず，オーストラリア訛りのある英語を話していなかった。

4.2.『ファインディング・ニモ』

『ニモ』は，きれいな水面や海底のサンゴ礁が映し出されて物語が始まる（図9）。カクレクマノミのマーリンとコーラルの夫婦は，自分たちの卵が孵化して子どもたちが生まれるのを心待ちにしていた。ところが，バラクーダに襲われ，たったひとつの卵を残してコーラルと卵は食べられてしまう。たった一人の生き残りがニモだった。

マーリンは，ニモを大事に育てる。やがて，ニモが魚たちの学校に入学

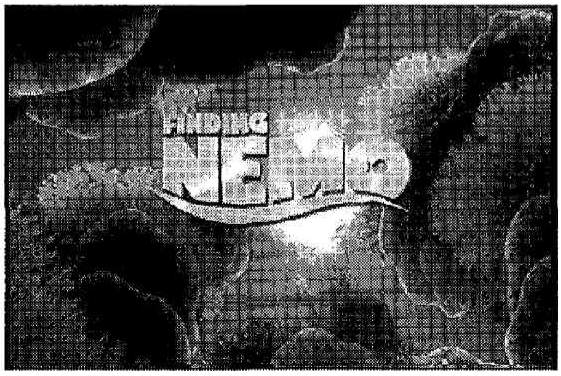

図9　『ニモ』のタイトルバック

©Disney/Pixar

する日が来る。心配して過干渉になりがちな父親のマーリンに反発したニモは，自分の勇気を示そうとクラスから離れて，海に浮かんでいるボートに近づく。しかし，水中に潜ってきたダイバーに捕まってしまう。

マーリンはニモを探すためにナンヨウハギのドリーと一緒に旅をすることになるが，ホホジロザメのブルースに出くわす（図 10）。

字　幕：「俺はブルース」
セリフ：“Name's [nãimz] Bruce.”

このシーンで初めて，オーストラリア訛りのある英語を話すキャラクターが登場する。『ニモ』では，「幾人かのオーストラリア人俳優が声を担当した」（Wikipedia, 筆者訳）。マーリンとドリーを「断魚」を誓うサメの集まりに誘うホホジロザメのブルース，アオザメのチャム，シュモクザメのアンカーは，ブロード・オーストラリア英語を話している。しかしながら，このオーストラリア訛りは，日本語字幕（「俺はブルース」）には反映されていない。

一方で，ニモは，気がつくと水槽の中にいた。背景として水槽からの眺めが画面に映る。海やオペラハウスが見えて，この海がシドニーハーバーであることが画像で示される（図 11）。

やがて，仕事をしている人間の声が聞こえてくる。話の内容から，この場所が歯医者の診療室であること，この歯医者がニモを捕まえたダイバーであることが明かされる（図 12）。彼も，ブロード・オーストラリア英語を話している。

図 10　マーリンとドリー，ホホジロザメのブルースとの出会い
©Disney/Pixar

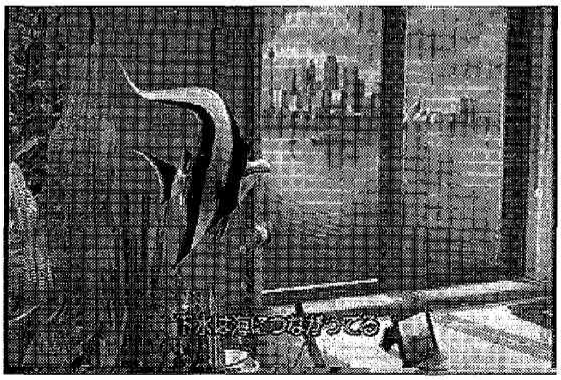

図 11　水槽からの眺め（中央に小さいニモがいる）
©Disney/Pixar

字　幕：「サンゴ礁を離れて　死にかけてた」
セリフ：“Beauty, isn't he? I found [fæund] that guy [gãi] struggling for life [lãif] and I saved [sãivd] him.”

ダイバーが歯医者だったということを踏まえると，歯医者がブロード・オーストラリア英語を話す場面は想像しがたい。大多数のオーストラリア人は一般オーストラリア英語を話す。しかも，歯医者は「より教養のあるオーストラリア人」であると考えられる。イギリスの容認発音に近い英語を話す方が，より自然であると思われる。

ところで，サメたちと別れたマーリンとドリーは，ニモを捕まえたダイバーが落とした水中メガネを見つけ出す。そのメガネには，ダイバーの住所が書かれていた（図 13）。

字　幕：(マーリン)「この文字は？」
セリフ：(Marlin) “What do these markings mean?”

ここで画像に埋め込まれた英語表記として住所が示される。英語が読める観客には，すぐに分かる。しかし，英語が分からない観客を想定した字幕版では，画像として示された表記を字幕に書き出して「見せる」，キャラクターがセリフで表記を読み上げている場合には，そのセリフに字幕をつけて「見せる」必要がある。

面白いことに，魚であるマーリンは，これらの英語表記を「文字」ではなく「マーキング」として捉えている。魚は，言語表記をもたないからであろう。残念ながら，ここのセリフの面白さは，字幕に活かされていな

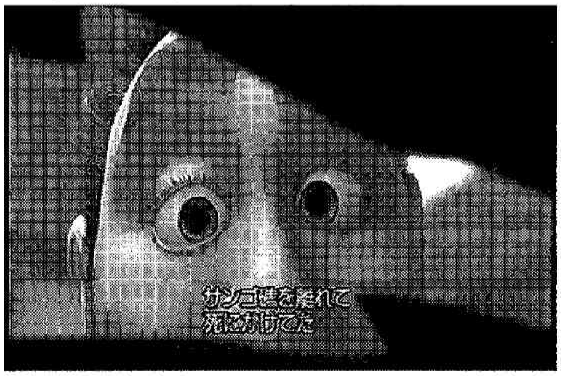

図 12　ニモを捕まえた歯医者登場
©Disney/Pixar

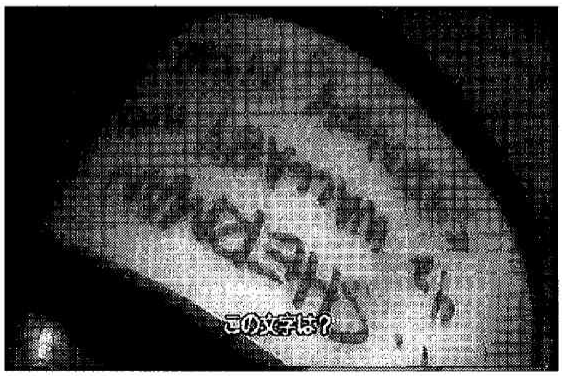

図 13　ダイバーが落とした水中メガネ
©Disney/Pixar

い。

マーリンとドリーが話をしていると，実はドリーが文字を読めることが分かる。マーリンに促されて，ドリーは住所を読み始める（図 14）。

字　幕：「P・シャー…」
セリフ：“P. Okay. P.” “Sher ...”

文字が読めないマーリンのために，ドリーが住所を読み上げる。同時に，そのドリーのセリフに字幕をつけることで，英語が読めない観客に対しても，画像に埋め込まれた英語表記が日本語で示される。

その後シドニーへ行こうとするマーリンとドリーに，アジの群れがオペラハウスの形を作って見せる。そして，東オーストラリア海流に乗った方がいいと教えてくれる（図 15）。

字　幕：「EAC に乗れ　東オーストラリア海流だ」
セリフ：“What you wanna do is to follow the EAC. That's East Australian Current.”

この字幕は，英語のセリフのままに “EAC” とローマ字表記をしている。セリフは，“EAC” と言ってから “East Australian Current” と頭字語を言い換える。字幕は，この説明部分を日本語に訳して「東オーストラリア海流だ」としている。

東オーストラリア海流に乗ったマーリンとドリーは，ようやくシドニー

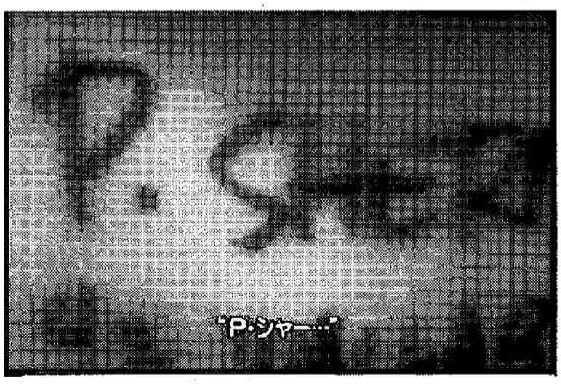

図 14　水中メガネに書かれた住所を読むドリー　©Disney/Pixar

図 15　マーリンとドリーに道を教えるアジの群れ　©Disney/Pixar

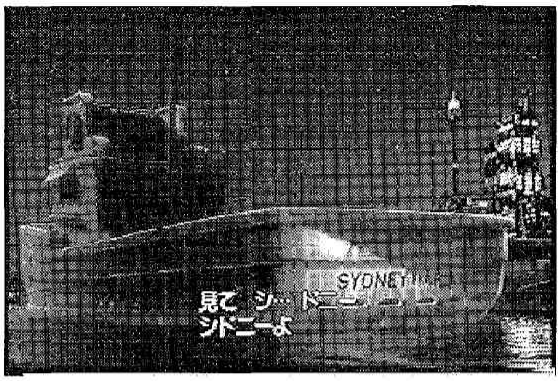

図16　マーリンとドリー，シドニーハーバーに到着　©Disney/Pixar

ハーバーに辿り着く（図16）。

英語表記：“SYDNEY”
字　　幕：「見て　シ…　ドニー　シドニーよ」
セ リ フ：“Sydney!”

図16のシーンでは，画像に埋め込まれた英語表記，日本語字幕，オリジナルのセリフという3つの表現モードが重なって同じ内容を表現している。

5. 考察

5.1. 画像，画像に埋め込まれた言語表記と字幕

ふたつ以上の表現モードを用いるマルチモード・ディスコースは，相乗的な表現性を獲得する。ひとつのモードが表現しきれない要素を，もうひとつのモードで補うことが可能になる。

英語映画の日本語字幕版は，マルチモード・ディスコースの一種である。オリジナルの英語版には，見せる，聞かせるというふたつの表現モードが与えられる。しかし，字幕版の場合には「見せる」ことに重点が置かれる。

・画像に英語表記を埋め込んでキャラクターに読み上げさせ，そのセリフに字幕をつけて観客に「見せる」
・画像に英語表記を埋め込むが「見せる」のみに留まり，キャラクタ

ーのセリフ及び字幕には盛り込まない
・画像にランドマークを含めた物語の舞台を描き出して観客に「見せる」

本稿で取り上げたふたつの映画において，画像に埋め込まれた英語表記やキャラクターのセリフは，それぞれの舞台となったアウトバック，グレート・バリア・リーフやシドニーのオペラハウスには言及していない。特にセリフや英語表記がなくても，画像に合わせて字幕をつけたというシーンも見受けられなかった。

5.2.『ビアンカ』と『ニモ』の違い

ふたつの映画の間には，地域らしさの表現に面白い違いが見られた。『ビアンカ』は，画像に地域特有の有名なランドマークを盛り込みながら，アウトバックに住むキャラクターの一部にオーストラリア訛りのある英語を話させた。『ニモ』は，オーストラリア特有のキャラクターというよりも，物語における悪役にオーストラリア訛りを割り振った。更に画像に英語表記を埋め込むだけでなく，それらの英語表記をキャラクターに読ませていた。「見せる」表現モードと「聞かせる」表現モードを掛け合わせて相乗効果を出していた。一方で，『ビアンカ』においても『ニモ』においても，主人公（ヒーロー，およびヒロインたち）は，地域訛りのない英語を話していた。

主なキャラクターの中で，オーストラリア訛りのある英語，特にブロード・オーストラリア英語を話していたのは，『ビアンカ』に登場するカンガルーマウスのジェイク，密猟者マクリーチに捕らわれたカンガルー（名前なし）とコアラ（名前なし）；『ニモ』に登場する3匹のサメ（ブルース，チャム，アンカー），ニモを捕まえたダイバー（歯医者）に留まった。

ことばの訛りには，地域らしさを表現する，物語におけるキャラクターの役割を示す，というふたつの機能があると考えられる。では，字幕という表現モードで訛りの効果を表すためには，どのような方法があるのだろう。キャラクターの役割を示すひとつの方法として，ことばの「投影」という選択肢がある（金水，2005）。オーストラリア訛りのある日本語はないが，オーストラリア訛りが醸し出す効果を日本語で表現しようとする試

みがことばの「投影」である。しかしながら，日本語字幕には，そのような役割語は特に見受けられなかった。

6. 終わりに

オーストラリアで生きる存在として描かれるキャラクターが，全て訛りのある英語を話しているのではない。地域的な特有性と関連して，それぞれのキャラクターが物語の展開において果たす役割が影響したと考えられる。オリジナル英語版に見られた多様な地域らしさの表現が日本語字幕に反映されていなかったことは，残念である。

地域らしさの描写の中にも，現実はある。「らしさ」の把握は，異文化理解にもつながる。しかしながら，情報の受け手として「らしさ」の描写を読み解くことが大切である。「らしさ」を読み解き，どのような視点から「地域らしさ」が描かれているのかを念頭に置いて，映画の世界に向き合う姿勢が必要であろう。

注

それぞれの画像は，DVD『ビアンカの大冒険～ゴールデン・イーグルを救え！』（発売元：ブエナビスタホームエンターテイメント）とDVD『ファインディング・ニモ』（発売元：ブエナビスタホームエンターテイメント）から引用した。

参照文献

Kress, Gunther, and van Leeuwen, Theo. (2001) *Multimodal Discourse: the Modes and the Media of Contemporary Communication.* London: Arnold.

Lippi-Green, Rosina. (1997) *English with an Accent: Standard Language Ideology, and Discrimination in the United States.* London and New York: Routledge.

Wikipedia, the free encyclopedia

http://en.wikipedia.org/wiki/Australian_Engish
(Last modified on 15 October, 2006.)

http://en.wikipedia.org/wiki/Finding_nemo
(Last modified on 17 October, 2006.)

http://en.wikipedia.org/wiki/The_Rescuers_Down_Under
(Last modified on 18 October, 2006.)

金水　敏. (2005)『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店.

菅谷明子. (2000)『メディア・リテラシー――世界の現場から―』岩波新書.

横瀬弘幸．(2003)「オーストラリア英語の特徴」『東京家政学院筑波女子大学紀要』第7集，49–60.